

詩篇56篇8-9節「味方なる神」

1A 敵が刷り込む神の姿

1B 偽りの父サタンのした仕業

1C 御言葉に対して

2C 神の善に対して

2B 神への不信

1C 意地悪な方

2C 明け渡せない自分

2A 私の味方

1B 潰える敵

2B 恵まれる方

3B 義認

4B 執り成し

5B 引き離されない神の愛

本文

詩篇 56 篇を開いてください、今朝は 56 篇 8-9 節に注目してみたいと思います。午後に 58 篇から 60 篇までを読んでみます。

8 あなたは、私のさすらいをしるしておられます。どうか私の涙を、あなたの皮袋にたくわえてください。それはあなたの書には、ないのでしょうか。9 それで、私が呼ばれる日に、私の敵は退きます。神が私の味方であることを私は知っています。

56 篇またその後の詩篇も、ダビデがサウルの手から追われて逃げていることが背景になっています。56 篇は、ダビデがガテで捕えられたことが背景です。ダビデは、サウルから逃げた時に最初に祭司アヒメレクのところに行きました。そして、パンがないかを尋ね、次に剣がないかを尋ねました。ちょうどゴリヤテをダビデが殺した時のゴリヤテの剣が、神の幕屋にありました。それをダビデは受け取ります。アヒメレクはなぜダビデが独りなのか、分かりませんでした。けれども、ダビデはサウルに追われていることはいうことができません。そしてその場からいなくなりました。

そして彼は、ペリシテ人のいるガテに行ったのです。なぜなら、サウルの敵のところに行けば、サウルの手には陥ることはないからです。ところが、ガテではダビデがゴリヤテをやっつけた、ペリシテの敵なので、自分がダビデであることがばれたら終わりです。果たして、ばれそうになりました。それで彼は気違いのふりをして難を逃れます。

このように、ダビデは今、ものすごく孤独です。たった独りで逃げています。その中で彼は、「神は私に敵対されているのか？」と思えばいくらでもできたのです。けれども彼は、峻別できていました。それは敵の声であり、神は自分の味方なのだという信頼を捨てなかったのです。私たちはダビデと同じように、「神は自分に敵対しているのか、それとも味方なのか？」という問いかけが絶えずあることを見ていきたいと思います。

1A 敵が刷り込む神の姿

この世において、人は二種類に別れます。信仰を持っている人と信じていない人の二種類です。なぜ信じることができているのか、そして信じていないのか？いろいろな説明ができるのですが、根本的なところでは、「神についてのイメージ」です。それは、神が良い方であること、神の善を知っていれば信頼できます。けれども、そうでなければ信頼できません。

1B 偽りの父サタンのした仕業

そして信頼できないとき、神はこうであると話す時に、実はそれは神の本当の姿ではなくて、敵である悪魔が歪めた神像、神のイメージであります。アダムが罪を犯した時、何が起こったかを思い出しましょう。蛇として現われたサタンがしたことです。「1b 蛇は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」2 女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。3 しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ。』と仰せになりました。」4 そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」

サタンはエバに神の言葉を疑わせました。そして、神がエバに意地悪をしていると思わせました。ご自分にだけ善悪を知るようにさせて、あなたには知らせない。わたしだけが神であり、あなたが賢くなるのをわたしは好まないからだ、というように思わせました。目の前においしそうなアイスクリームがあるのに、嫌がらせて食べさせないいじめっ子のようです。けれども神は、そう考えておられませんでした。目の前にある石油ストーブを、自分の愛する子が触れないように守ってあげている、そのような姿だったのです。

1C 御言葉に対して

サタンは、神の言葉を歪め、それによってエバの神への信頼を取り上げることに成功しましたが、言葉が私たちと神が交わるための手段になっています。私たちは、言葉をもって、また霊をもって神を知ることができ、神を礼拝しています。イエス様はサマリヤの女に、「神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。(ヨハネ 4:24)」と言われました。まこと、つまり真実な言葉、真理の言葉のことです。神が語り、それを私が聞きます。そして、私たちも神を信頼する表明を、言葉をもって言い表すことによって神を知ることができます。ですから、「言

葉」はとても大切です。例えば、私たちは賛美を捧げますが、そこで大事なものは曲ではなく歌詞です。神をほめたたえる言葉を、歌の調べに合わせて話しているので、私たちは神と交わることができます。

そしてもちろん、言葉だけではありません。イエス様は霊によっても礼拝すると言われました。単なる書かれた文字ではなく、人格の触れ合う語りかけの言葉、声として、神ご自身に会うことができます。それは言葉を越えたところの知識があります。言葉に言い尽くすことのできない喜びがあります。しかし、言葉を使っています。ですから、まことと霊によって神を礼拝するのです。

それで悪魔は、何とかして言葉を破壊しようとするのです。神の言葉に信頼を持たせないようにします。これは、人間関係に当てはめるとすぐに分かりますね。私たちは神のかたちに造られた訳ですが、言葉による意思疎通が信頼関係の要です。互いに真意を分かり合えたのか、それを確かめていくことを絶えず行っている訳です。それがすれ違くと、誤解が生じ、信頼関係を失いかねません。そこにサタンがつけ入ります。同じように、神の御言葉に対して誤解を生じさせるようなことを言い含めるのです。

けれどもダビデは、この詩篇で繰り返して、神の言葉をほめたたえています。4 節、「神にあつて、私はみことばを、ほめたたえます。私は神に信頼し、何も恐れません。」と言っています。10 節、「神にあつて、私はみことばをほめたたえます。主にあつて、私はみことばをほめたたえます。11 私は、神に信頼しています。」と言っています。神のみことばをほめたたえています。ダビデは、神のことばが与えられて、そこで神への信頼が与えられ、それでほめたたえているのです。ここに、神のことばへの全面的な信頼があります。

2C 神の善に対して

そして私たちは、神を信頼する時に、この神は良い方だ、良い意図をもって語ってくださり、行なってくれることを信じることができるからこそ、信じられます。詩篇 73 篇で、自分の歩みはずるばかりだ、と言って、信仰的に滑ってしまおうと告白している著者の姿を見ることができます。そのように信仰が試されたのですが、けれども初めに彼はこう言いました。「まことに神は、…いつくしみ深い。」慈しみ深いのヘブル語は、トブ、「良い」という意味です。主が良い方だから、今、たとえ他のものが目に入ってきて、信仰的にスランプになっても、それでも神から離れようとは思わないのです。何が支えるかと言いますと、神が善なる方だということを受け入れているかどうかなのです。

2B 神への不信

1C 意地悪な方

ここが神と私たちをつなぐ、生命線です。これがないと、私たちは神に近づきたいと思えませんし、神に近づきません。イエス様は、タラントの喩えをされました。タラントとは貨幣の単位ですが、主人がしもべに、自分のタラントを託して旅に出かけます。ある僕に主人は、五タラントを渡し、ある

者には二タラント、そしてある者に一タラントを渡しました。託された僕たちは、その資金を運用して商売をするのです。主人が帰ってきました。五タラント受け取った者は五タラント儲けました。二タラントの者は二タラント儲けました。しかし、一タラントの人は、地面の中に隠して何もしていませんでした。そしてその一タラントを主人に返しました。主人は、後で「銀行に預けていれば、利子も付いたであろうに。」と言いましたが、その僕は主人に何ら関わりあいたくなかったのです。その理由をこう話しています。「ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。(マタイ 25:24-25)」

彼の主人に対する見方が、「酷い方」でした。それは、蒔かないところから刈り取る、散らさない所から集める、という方です。彼は、五タラントを受け取っている人、二タラントを受け取っている僕を見たのでしょうか、それで自分には神からそれ相応の資金が与えられていないと思ったのでしょうか。そして、そこから搾り出すように利益を出さなければいけない、そのように持っていないのにそこから出さなければいけない人なのだ、と見た訳です。しかし主人は、そのようなことを一切、言われていません。持っている一タラントを、捧げなさいと命じておられたのです。

福音というのは、聖書の最後に記されているイエス様の呼びかけに集約されます。「渴く者は、来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。(黙示 22:17)」ただで受けるのです。そのままの自分で、ありのままの自分でそのまま、神に近づくのです。これだけのことをしなければ、これだけのものを持っていなければ神のところに近づけない、というのではなく、今、すでに与えられているもので、それをわたしに捧げなさいと呼びかけておられるのです。神の命令は重荷とはなりません、神は私たちが自分の持っているものを差し出す時に、神の命令に従うことのできるためのあらゆる力と知恵をくださるのです。

2C 明け渡せない自分

主はエレミヤを通して、「それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。(29:11)」と言われました。神こそが、私たちの最善を行われることを意図しています。けれども、自分を神に明け渡すことができないのは、自分の最善を神がかえって奪い取ってしまうのではないかと、神に従うことは他に悪いことが起こるのではないかと恐れるからです。

私たちが学んだ「新しい信者の学び」には、次のような説明があります。「人々がなぜイエス・キリストを自分の人生の主として認めたくないかには、2つの理由があります。1) 神が、自分のしたくないことをするように言われるのではないかと恐れているからです。2) 神が自分の最も善いことをし、深く心にかけてくださっているという確信がないからです。」一つ目のほう、自分のしたくないことをするように言われるのではないかと、ということですが、いかがでしょうか？アメリカ人が海外宣教についての勧めを聞くと、「アフリカの奥地に行って、人食い人種に福音を伝えなければいけな

いのか？」という恐れを抱くのだそうです。日本ではどうでしょうか、私たち夫婦は二人とも、「牧師にだけはなるな。」と親に釘づけされました。私自身は水のバプテスマを受ける時に、「クリスチャンになるのはいいけれども、牧師にだけはなるな。」と言われました。妻は、「牧師とだけは結婚するな。」と言われたそうです！貧しくなる、と感じるからです。

アメリカ人の抱きやすい恐れについて、興味深い逸話があります。チャック・スミス牧師が、ある未開の地にいる宣教師を訪問しに行った時のことです。その宣教師は、そこにいてとても幸せだということです！なぜか、普通、人が嫌がるような虫が、ちょうど昆虫大好き少年のように好きなのだそうです。そして自分の子供たちに教育を受けさせられない心配もなく、「子供たちの目の前にあるのは、生の植物・動物図鑑です！」と言うではありませんか！主にお従いするときに、主はそれに従うための力と知恵も備えてくださいますが、それだけでなく願いをも授けてくださいます。「主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。(詩篇 37:4)」

主に明け渡せないもう一つの理由が、「神が自分の最も善いことをし、深く心にかけてくださっているという確信がない」でしたが、これに対する答えは本文、詩篇 56 篇 8 節にあります。神が、ダビデのさすらいを記しておられます。そして、彼の涙がすべて神の皮袋に蓄えられています。そして、神の書物にその涙が書き記されています。新改訳では、「ないのでしょうか」と疑問形になっていますが、これは「書き記されています」ということの裏返しです。ダビデはたった独りでしたが、そして彼の心の痛みと涙は、他の誰にも共有できないものですが、分かってくさっているのは神ただひとりなのです。

2A 私の味方

そこでダビデは、はっきりと言うのです。「それで、私が呼ばれる日に、私の敵は退きます。神が私の味方であることを私は知っています。」神が自分に敵対しているのか、どうか？という問いに対して、彼は臆することなく「神が私の味方であることを知っている」と言います。このダビデの信仰告白を取り上げて、パウロはローマ 8 章で、信仰による義についての教えをまとめあげます。まず、ローマ 8 章 31-34 節まで読んでみましょう。「31 では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。32 私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子とっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあります。33 神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。34 罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしてくださるのです。」

パウロはローマ 8 章において、御霊に導かれることについて話しています。そして御霊に導かれることは、バラ色の人生を約束するものではなく、むしろキリストが苦しまれたようにこの世においては苦しむことを話しています。しかし、神が共におられるのです。その苦しみは失望に終わるの

ではなく、むしろ栄光をキリストにあって受ける道であります。

1B 潰える敵

31 節、神が味方であるから誰も敵対できないと教えています。敵は潰えるのです。神が私たちに与えておられる戒めがあります。もちろん過ちや罪もあり、それを悔い改めるのですが、神が私たちに戒められる時に、実は自分がいけないと思っていたことが実は神は行ってほしいと願っていたことで、自分があまり気にしていなかったことを神は、「なぜ行わないのだ」と励ましに近い叱責を行われます。自分の内で、いつの間にか自分を責めている、自分を罪に定めているのです。

昔のことを思い出します。スクール・オブ・ミニストリーで、私は六か月前に聴講を始めました。英語は知っていたつもりですが、話すこと、聞くことができませんでした。そして入学し、その一年後、先生から「現代のイスラエル国に、聖書の預言がどのように成就しつつあるのかを論じなさい。」という発表が課せられました。終末論の授業での話です。私は、「英語ができません。」と答えました。校長先生は、「何を言っているのだ。あなたは、ものすごく話せるようになった。そうやって話せないと言っているほうが、むしろ嫌らしく聞こえる。」というような励ましのような、叱責を受けました。

同じようなことを私たちは霊的に犯しています。私たちはいつの間にか、自分で自分を判断しています。そして、それがあたかも神からのものだと錯覚します。しかし神は私の味方なのです。けれども、神はご自分の憐れみによって愛し、選び、それでお用いになりたいと願われているのです。

2B 恵まれる方

32 節、これは、神は豊かに施してくださるという約束です。私たちは、主にすべてを明け渡す時に自分が何か取られてしまうのではないかという恐れを抱きます。事実、霊の戦いの中で敵が私たちからいろいろなものを奪い取ります。健康であるかもしれない、家族のことかもしれない、財産かもしれないです。けれども、神は御子を下さったのです。その方が、御子と共にすべてのことをくださるのです。私たちは、いろいろなものを失ったと思います。けれども、よく考えてみたら、何も失っていないことに気づきます。「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者はそれを救うのです。(マルコ 8:35)」

例えば、「私には友達がいません。」と嘆いて教会の人たちに話します。そしてみなが、親身になって聞いています。そして祈ります。声をかけてくれます。神が自分に友達を与えていないと思いつつ、その話を聞いている兄弟姉妹がすでに友達になっていることに気づいていません！神はキリストと共に必ず、私たちの必要を満たしてください。

3B 義認

そして 33 節、神は義と認めてくださいます。サタンは、この部分を激しく責めています。そして、

神ご自身が自分を訴えていると感じるほどにするのです。しかし、神は私たちの罪を取り除き、まったく罪から清め、ご自身の義をキリストにあって身に付けさせてくださっています。ゼカリヤ書 4 章に、とても不潔な服を着ている祭司ヨシュアを、サタンが神に訴えている幻があります。サタンに対して、主の使いがこう宣言します。「サタンよ。主がおまえをとがめている。エルサレムを選んだ主が、おまえをとがめている。(3:2)」そして主の使いは、ヨシュアの汚れた着物を脱がせて、「わたしは、あなたの不義を除いた。(4 節)」と宣言し、そして聖なる礼服を着せました。ここローマ 8 章にも、「神が選んでくださった」とあります。だから、だれもあなたを訴えられない、とあるのです。だから、キリストが盾となってくださり、私たちを守るのです。

4B 執り成し

そして 34 節、キリストが執り成していただきます。私たちが、救われたけれども再び罪を犯して罪に定められてしまうのではないか？という恐れがあります。けれども、主は終わりまで守ってくださいます。これは、私たちが主の愛に留まる不断の努力をしなくてよい、ということではありません。御霊が私たちの内におられるなら、その努力をするように導いてくださいます。けれども、救いの保障は、私たちの努力ではなく、もっぱらイエス様ご自身の守り、その執り成しの祈りがあるからです。ユダは手紙でこのように勧めました。「あなたがたを、つまづかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる…(24 節)」

つまづいたペテロのことを思い出してください。イエス様は、罪を犯すことを初めからご存知で、ペテロのために執り成しを行われました。サタンがペテロの信仰をふるいにかけました。けれども、イエス様が父なる神に祈られました。それで、ペテロはイエス様を三度知らないと言ったけれども、立ち返ることができました。そして他の兄弟を励ますことができました。主はすばらしい方です、私たちが悪から立ち上がらせてくださり、再び主に仕えることができるようにしてくださいます。

5B 引き離されない神の愛

そして、パウロは続けて、ローマ 8 章において、「**私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、…(35 節)**」と続けて話しています。これらのことの中にあっても、圧倒的な勝利者だと宣言しています。これが、ダビデが詩篇 56 篇で行っていることです。神が私の味方だと分かっているから、11 節、「私は、神に信頼しています。それゆえ、恐れません。人が、私に何をなしえましょう。」と大胆に告白できているのです。

私たちは、猛烈な霊の戦いの中に置かれています。それは、何とかして私たちを罪定めして、神が自分に敵対していると思わせて、私たちが神に信頼しないようにあらゆる手を使っています。神の言葉をねじ曲げ、神の善を疑わせて、混乱するように仕向けます。激しい攻撃があっても、しかしダビデのように、「私は神に信頼しています。恐れません、肉なる者が私に何をなしえましょう。」という告白をもって立ち向かってください。神はあなたを愛し、キリストにあって選んでくださったのです。神は味方です。自分の行ないではなく、神が一方的にそうしてくださったのです。